文学を教えるということ

大河原忠蔵

一、若者の殺意と自己放棄

現代は物は豊かになったが、人の心は貧しくなったとよく言われる。ワイドショーなどでは、殺人、殺人未遂をはじめさまざまな凶悪犯罪を詳しく取り上げ、現代の暗さを指摘している。若者もまたその暗さの中に身を置き、そこで救いのない物の見方、考え方を自分で作り出している。

私は一九九四（平成六）年から二年間、東京都内のあるコンピューターの専門学校で、文章表現指導の講師をした。男子学生の多い共学の専門学校だった。私はその指導の導入部で、「今考えていることを、そのまま書いてみよう」という課題を与え、四百字詰め原稿用紙一枚を配って教室で書かせた。

授業が終わって、私はすぐそれを読み、驚いた。次から次へと文章の内容が暗いのである。こういうことを考えながら、彼等は今日も生きているのかと思い、ぞっとした。

老人に対する反感はかなり深刻である。

「老人どもは、子供を好きで生んだんだ。生んだのなら、そこで子供を育てる義務がある。だから育てて当たり前なのだ。子が大きくなったら、それが親孝行ではないか。それが何だ、面倒見が悪いだ何だと言いやがって。ずうずうしいにもほどがある。動物でも持っている最低限の力が生殖能力、すなわち種の保存だ。老人にはもうその力も無いではないか」（N・H）

人に対する殺意が日常化しているのにも驚いた。「僕には嫌いな人間が沢山いる。人生、やること終えたら、殺しに行ってやるぜ」（W・S）「電車の中で酒に酔っ払っている奴を見ると、殺したくなる」（O・N）「某レストランで皿洗いのバイトをしていた時のマネージャーはむかつく奴で、殺したくなった」（S・Y）

殺意は家族にも向けられている。「俺の家は牢獄と同じだ。親はいつも俺を監視し続ける。親父はいきなり怒る。お袋はいつでも、餓鬼扱いしやがる。狂い出しそうだ。最近よくキレる俺。早くここから脱走したい。信用できねえ。落ちる所まで落ちていき

たい。投げ出したくなる毎日。家族の絆はもう無い。殺してやる。別れる。絶縁状。そんな言葉が家の中にとどろいている」（I・T）

女子学生も簡単に人に殺意を向ける。「私はタバコが嫌いだ。駅で喫煙所から離れているところで吸っているヤツがいる。吸いがらを線路に捨てる。そんなヤツがいると、殺意さえ覚える」（H・M）（女子学生）

意識が殺しの方向に向かない学生は、自分で考えた型に自分を押し込める。その押し込め方は徹底的で激しく、また絶望的である。「私は一人でいる時以外、自分を殺して生きている。心のすみに自分を置いて、作った人格で人に接している。私は人に好かれ、愛され、信頼される為に、一般によい行いもするし、みんなとバカな話で大笑いもする。人の心も大切にする」（N・H）「私自身、うす汚れている人間だ。生きている人間のすべてがうす汚れている。自分のすべてをさらけ出せる奴がいるか。私の結論は心のよりどころなど考えずに、やるべきことだけをやって、人生を終えればいいということになる」（S・Y）

親から虐待されていた女子学生O・Kは自分は生まれたくなかった家に生まれてしまったと深刻に悩み、そのように運命を仕組んだ神を呪う文章を書いた。彼女はある夕方、ぼんやりとバス停に立っていた時、見知らぬ男に車でホテルに連れて行かれ、翌朝、捨てられた。彼女は生きた屍になった。

私はこうした文章を前にしたとき、ここではどうしても文学教育を実践する必要があると考えた。文学の力によって、若者の認識を開き、その発想を豊かにし、細部の真実の存在に気づかせ、文学的思考に目ざめさせるのである。問題は、自己自身を殺人や自己放棄、救いのない絶望や神への呪いなどと一挙に短絡させて疑わない学生達の直線的思考の頑固さにある。それに文学の力でゆさぶりをかけるのである。

この指導では作品名を示して自宅で読んでおきなさいではだめである。授業で作品のコピーを配り、それを克明に分析し、急所には執拗に目を向けさせ、その文体が学生に乗り移るように仕向ける。そして「君たちにだって、このような文学的発見はできる。さあ、君たち自身の発見やその時の思いを、この作品をモデルにして書いてみよう」と持ちかけるのである。

この方法を実行するには、文学作品は詩か短編がいい。その専門学校では七〇分の授業が週一回になっていた。もし長編を取り上げるなら、切り取って使うことになる。

私はこの時の教材として、芥川龍之介の「蜜柑」と梅崎春生の「猫の話」を選んだ。「蜜柑」ではこの世にはやさしさがあるという人間性の発見に、「猫の話」では孤独な人間の根底につきつめた愛があることに共感させることを考えた。

「人間は無意味で無目的な生命を生きている」という考え方がある。文学教育はこの考え方とどう向き合うのか。課題は大きい。美や充実を求める心はどうなるのか。

二、人生の宝石を求めて

芥川龍之介「蜜柑」の作中の「私」は、生きることの疲労と倦怠におそわれ、自分でもそれをどうすることもできないでいた。曇った冬の日の夕方、「私」は横須賀駅に停車中の車内で発車を待っていた。発車まぎわに一人の田舎娘が乗ってきた。「私」はその小娘を「不可解で下等で退屈な人生の象徴」と見た。「私」のそばに腰掛けた小娘は、しきりに窓をあけようとする。トンネルに入ってもあけようとする。窓はあき、煙が入ってくるが、汽車はトンネルを出る。外の踏切りの柵の向こうに、三人の男の子が並んでいる。三人は汽車の窓から顔を出している小娘に向かって何かを叫んでいた。

> するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いよく左右に振ったと思うと、たちまち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降ってきた。私は思わず息をのんだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから方向先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切まで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

この場面は「瞬く暇もなく」過ぎていった。しかし「私」の心には「切ないほどはっきりと、この光景が焼きつけられた」のだった。焼きつけられただけではなく、「そこから、あるえたいの知れない朗らかな心持ちがわき上がって」きた。ここがこの作品の急所になる。

作品分析では、曇天の夕暮であるのに、「暖かな日の色に染まった」とあるが、これはどういことか、とか、「蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降ってきた」とあるが、「降っていった」が正しいのではないか、といったことを問題にした。「降ってきた」については「私」が子供の目になって蜜柑を見たからという説明もあるが、ここでは「私」の感動が中心だから、「私」の心の中に降って来たと理解する方がいいと私は指導した。その時の蜜柑が心の中に「降ってきた」というのは、文学的表現で、日常語ではあり得ない。ここが肝心な箇所になる。蜜柑は日常を越えた。

私は作品分析のあと、学生に次のような課題を与えた。

「言いようのない疲労と倦怠の中にいたこの作品の主人公は、小娘が弟たちに蜜柑を投げたのを見て、一条の光を与えられた。それは救いであった。君たちの生活の中にも、この作品の蜜柑にあたるものはないか。作品の蜜柑は主人公にとって心の宝石、人生の宝石になった。君たちも君たち自身の宝石をさがしてみないか。それを文章に書くことにしよう。長さは四百字以内」

学生はさまざまな体験を文章に書いた。小説「蜜柑」と同じよ

うな発見、出会いは無かったが、小説「蜜柑」は彼等の文章に生きていた。次に三つ、とりだしておく。

電車にて

飯田倫英

帰りの電車の事だった。夜おそくだったからか、電車はすいていて、立っている人は一人もいなかった。

向いの席に女の人がすわっていた。二十代後半から三十代前半の人だった。きれいな人だった。彼女は何もしていなかった。目線があう。目線をそらす。それでも彼女はこっちを向いていた。でも自分以外の何かを見ているようだった。

駅が近づき、車内にアナウンスがひびく。彼女は足の上においてあったバッグから何かを取り出し、組み立てた。それを見ておどろいた。盲人用の杖だった。彼女は目が見えていない。外観は普通の女の人と変わらないのに。

駅に着いた。彼女は何事も無いように電車を降りた。扉が閉まり、また走り出す。ホームを歩く彼女が見えた。自分は彼女がしあわせになってほしいと思った。

筆者は女の人の盲人用の杖を見たときの驚きを書いている。筆者の心はこの驚きによって女性に近づき、ホームへ降りた女性の後ろ姿を見て、「しあわせになってほしい」と祈るような気持になった。この女性とのこういう形の出会いをしっかりと意識的にとらえることにより、筆者は女性の将来のしあわせを祈るやさしい人間になっていた。盲人の女性の姿を祈りの目で見つめた筆者の目は人生の宝石を発見できる目である。

体験から考える

野元政輝

私が公園で本を読んでいた時の出来事である。

公園の前の道路で、下水道の工事を、たくさん汗を流しながらがんばっている人達がいた。私は次に起こる出来事がなければ、この人達に対して何も感じなかっただろう。

公園の中に、大声で泣く子と、これまた大声でどなる母親がいた。なぜ子供が泣いて、母親がおこっているのかはわからなかった。そのうちに母親がどなりながら、「そんなにワガママだとあんな風になるよ！」と言って、工事をしている人達を指さした。私は指さされた人達を見た。その中の一人と目が合った時、彼はさびしそうに笑った。

私は思う。人にやさしくとか人を傷つけてはいけないなどと、口ではたやすく言える。しかも、それは自分に都合よく考えていないだろうか。それを考える度に、私はさびしく笑った彼の顔が浮かび、そしていつまでも消えないのである。

人権問題が厳しく言われている現代、下水道の工事をしている人を指でさし示して、自分の子に、大声で、「そんなにワガママ

だとあんな風になるよ」とどなる母親がいるのだろうか。いたのである。言われた人はどんな気持ちになったか。筆者はその人と目が合い、その人の心をつかんだ。その人は「さびしそうに笑った」のだった。筆者はそれを見逃さなかった。ここがポイントになる。そのさびしそうな目と笑いを発見できた筆者の目は、人生の宝石を発見できる目である。

ある雨の朝　　細田結佳里

朝起きると、窓の外は雨だった。憂うつな気分。足どりも重い。いつもよりも早めに家を出た。

駅に着き、改札を通る。階段をおりると電車がきていたので急いで乗る。間に合った。車内を見回すと、いつもよりすいていた。ラッキー。いすに座った。ぼーっと下を見ていた。通路は、びしょびしょだった。少したって窓を見た。雨の雫がたれ、くもっている。その後ろには、見なれない景色が広がっている。くもっているから。始めはそう思った。でも、あまりに違いすぎる。電車はある駅についた。「間違えた」あわてて降りた。

私は、反対方向の電車に乗ってしまっていたのだった。

ま、いっか、雨の日だから……。

筆者は電車を乗り違えた自分を責めずに、「ま、いっか（「いいか」のこと）、雨の日だから」という詩的な理由で自分を許している。雨との一体感の中で心を休めている。「こんな遠まわりをして、くやしい」といらだっていない。「これで諦めをつけよう」という負け惜しみでもない。この専門学校生の一人が書いていた「私自身、うす汚れている人間だ。生きている人間のすべてがうす汚れている。自分のすべてをさらけ出せる奴がいるか」といった突き詰め方から自由になっている。その自由は文学から出てくるもので、筆者はその地平で人生の宝石を発見することができる。車窓の外の雨の風景を見ていた時、筆者は人生を見ていたのである。

三、状況認識の文学教育

芥川龍之介「蜜柑」などの作品分析をしたあと、学生に体験文を書かせた専門学校での私の指導は、私がそれ以前に提唱した「状況認識の文学教育」にもとづいていた。この考え方は、『状況認識の文学教育』（一九六八　有精堂）『状況認識の文学教育入門』（一九七〇　明治図書）にまとめてある。

私は高校で国語の教師をしながら、この文学教育について考えた。文学作品の影響下で体験文を書かせるのだが、「体験」と言っていると「状況」の観点が逃げやすい。戦争と戦後、状況の観点が人間認識の核心的部分になっており、戦後文学ではこの状況を大きくとりあげている。

戦後文学の野間宏は自分の文学理論を「感覚と欲望と物について」（一九五八）に書き、「人間と人間を取り巻いているものを同時に考え、この二つのものを一挙にとらえるものとして状況という考えがある」と述べている。人間を取り巻いているものは一般に環境と呼ばれてきたが、この環境に主体が介入すると状況になる。戦争が状況という考え方を鮮明にした。

いきなり原爆が投下される。被爆者は被爆状況の中を水を求めてさまようのであって、環境の変化と向き合う、などと言っていられない。千葉県の九十九里に上陸してくる米軍の戦車に爆薬を抱いて飛び込む陸の特攻隊の兵士が、九十九里の山の中に連れていかれ、中隊長から「いいか、ここがお前らの死に場所だ」と言われた時、兵士にとってその山の斜面の意味は、突然、自分の墓場になった。戦争は人間と環境の静かな関係を根底からこわした。突然何かがあらわれて死が迫り、見ず知らずの場所が自分に食い込んだ。逃げ道はなかった。

戦後の社会でも状況が猛威を振るった。多くの人々は状況と一体化して自分を安定させた。物が救いになった。高校生の意識は商品の幅でしか動かなくなっていた。エレキギターの音がそこにあるだけで、自分にとってその音を出すことの意味が何であるかを問う力はなかった。精神が物に貼りついていた。

私は高校生に文学の力で状況を発見させることを考えた。作品分析を深める教材は、教科書の文学教材のほかに、野間宏「顔の中の赤い月」や安部公房「けものたちは故郷をめざす」を取り上げた。そして、状況とのかかわり方、状況のとらえ方を中心に作品分析をした。また、作品の文体を生徒に乗り移るように仕向けた。そして、体験を書く形で、彼らの状況をえぐりとらせた。

その高校は男子校だった。ある生徒は、飼い犬が自分の目の前でいきなり子雀をかみ殺すのを見て、その子雀の墓を作りながら、もし自分がこの子雀なら、自分の存在の意味はどうなるかを考えた。また、ある生徒は一人で、雨の夜、銀座の酒場に行った時の場面を克明に書き、自分の相手をした酒場の女の言葉の空しさに到達した。

高校生が酒場に入ることは非行になる。私はこの非行を文章に書くことを認めた。生徒は非行の場の状況を生き生きと書いた。処罰の対象にならないかという問題があったが、ここに書かれているのは文学であり、フィクションだと言うことにして、処罰の対象にはしなかった。

私はさらに、自作スライドで教材を作り、文学の視点を映像で示した。その時、土門拳の写真集『筑豊のこどもたち』や『ヒロシマ』などの映像のあり方、組写真の作り方が、自作スライドを作る私の参考になった。土門拳の映像は状況をえぐり出していた。映像論の本で読んだ「クローズアップの内面性」という説明も、撮影の時に役に立った。クローズアップの手法は対象から状況をとりだす力を持っていることを私は撮影で理解した。

私は八七コマの自作スライド「城が島」をつくり、それを一クラスの生徒に見せ、東京から神奈川県三浦半島の城が島に連れて

いった。手帳を持って自由に歩き、島の状況を取材して文章にして提出させた。それは文集にした。生徒は島を歩きまわり、私がスライドで見せたものを探しあてて見た。岩をくりぬいて作った島の火葬場、海鵜がいる断崖、島の人が暮している集落、小学校の分教場などを訪ねることにより、燈台と土産物店を中心とした観光地城が島の殻を突き破った。分教場では小学生と仲よくなり、話し合っている。城が島の状況をとらえるために、海岸に落ちていた漁民のわらぞうりの表と裏を克明に描写した生徒もいた。生徒は城が島の状況に迫った。

私は自作スライドから出発して文集づくりで完了するこの方法を、山梨県の山中湖、栃木県の谷中の遊水地でも実践した。山中湖では、アメリカ軍の基地の問題が中心になり、谷中の遊水地では渡良瀬川鉱毒事件が中心になっていたことは言うまでもない。出発前の自作スライドの映写で、私はその映像が切り取っている状況の意味を説明した。山中湖の実践は『行動する文学教育』（一九八六　くろしお出版）で、谷中遊水地の実践は雑誌「日本文学」（一九七三・一二）でまとめた。

私が発表した文学教育に「状況認識の文学教育」という名称をつけたのは、国文学者の益田勝実だった。この名称により、体験の中の状況、体験の中の文学を鋭く取り出さなければならないことが明確になった。

私は五四歳の時、高校から大学へ移った。大学でも学生に状況認識の文章を書かせた。国語科教育法の講義で、状況認識について話し、また文学の形象が持っている具象性と意味性、さらに場面について話した。そして、学生自身の状況認識を書いて、レポートの一つとして提出させた。すぐれた作品が集まった。そのいくつかを私は『文学的思考へのいざない』（二〇〇〇　東北大学出版会）に引用した。奈良教育大学、奈良女子大学、武庫川女子大学の三つの大学の学生の作品である。山内和子（奈良教）の「ルームメイト」、藤田桂子（奈良女）の「コスモス」、川口貴子（武庫女）の「倦怠」などは出色の作品になっている。私はこれらの文章を作文ではなく作品と見ている。

高校生や大学生が書いたものを文学と言えるか、という人もいるかもしれないが、そういう人は文学賞を取った人の作品とか、文学年表に出ている作家の作品でなければ文学を感じないという権威主義者にすぎない。私は学生のすぐれた「短編ノンフィクション」の作品を、志賀直哉や伊藤整、林芙美子などの作品と同じように文学と見る。

劇作家で歌人であった寺山修司は、この問題を演劇の立場で、明快に説明している。それは、一九七九（昭和五四）年四月二九日、NHKラジオ第一放送から放送された寺山修司の講演の一部で、講演の題目は「演劇の魅力」。私はそれを録音し、現在まで持ち続けて来たので、ここで文章に起こすことができる。

高名な女優が他人の書いたせりふを言って舞台の上で「女の一生」を演じると、それを見て、みんな、あの人はうまい

と拍手をする。

そういう「女の一生」もあるけれど、しかし、たとえば、駅前の踏切のところで一生をすごしてきた六十何歳のおばあさんが、息子が死んだときのことや、戦争のことなんかを自分の言葉でお客さんに語る、そういう「女の一生」もあるはずなんですね。（寺山修司講演テープより）

たしかにモーパッサンや森本薫の「女の一生」はよく知られているが、無名の老女の「女の一生」の語りも、立派に演劇になるという見方である。これは「天井桟敷」を主宰して前衛的な演劇活動をした寺山修司の基本的な考え方になっていた。

寺山修司が演劇で展開した問題を、私は文学教育の分野で展開してきたつもりである。

状況認識の場合、切り取った場面の〈具象〉と〈意味〉が、どこまで生き生きと、つきつめて、的確に書かれているかが問題になる。具象性と意味性が書かれているか、いないかが、その文章が文学の文章になっているかどうかのきめ手になる。すぐれた学生の文章は文学の文章になっていた。文学作品になっていたのである。プロの作家でなくても、文学は書ける。

四、武者小路実篤の個性論

私が高校で国語を教えている時、高二の教科書に武者小路実篤の「個性についての雑感」という文章が出ていた。私はこの教材について、ただ指導書を参考にして教えるのでなく、自分なりの教材研究を進め、それで教えてみようと思った。

「今日から武者小路実篤の文章だ。武者小路実篤は白樺派の作家だ。白樺派は人道主義だ」といった導入をしても、生徒は恐らく何の興味も示さないだろう。私は、出席をとり終ったら、開口一番、「昨日、武者小路さんの家に電話をしたんだ。すると、すぐ、武者小路さんが電話口に出てね……」と言える授業を組み立てたいと考えた。生徒がハッとしてこちらを見ることは容易に想像がつく。

「個性についての雑感」は三ページの短い文章であるが、武者小路実篤が二七歳の時、一九一二（明治四五・大正一）年に書かれたもので、彼はここに書いた考え方を生涯持ち続けた。一般に個性というと、その人が持っている特徴、人との違いという意味で理解されがちだが、この文章で武者小路実篤が言っている個性は、自分の内部からわいてくる力のことになっている。言葉としては「内から来る自己の要求」「内から来る力」「内の力」が使われ、そういう力で一歩一歩進んでいった人の例として、ベルギーの詩人・劇作家のメーテルリンク、オランダの画家ゴッホをあげている。

たまたま私はデパートの中で、「個性の夜明け」と書いてあるポスターを見つけた。色とりどりのホットパンツを身につけた数人の若い女性が喜びにみちて空中にはね上っている写真が出てい

る。同じホットパンツは無い。私は、なるほど、これがデパートで使う個性の概念だなと思った。人との違いである。私はこのポスターは授業で使えると考え、デパートの事務室に入って、売ってくださいとたのむと、「さしあげます」と言われた。私はそのポスターを黒板にはって、授業の導入に使った。ついでに、これが商業主義の個性の概念だとつけ加えておいた。

武者小路実篤は、個性尊重の場として「新しき村」を創設したが、私はその「新しき村」を訪ねることにした。「新しき村」は一九一八（大正七）年、九州の日向につくられたが、現在は「東の新しき村」として埼玉県の毛呂で営まれている。一九六九（昭和四四）年四月一三日、私は高崎と八王子の間を走る八高線の毛呂駅で下車、「新しき村」を訪ねた。村の入り口に、「この道より我を生かす道なしこの道を歩く」という言葉が、武者小路実篤の筆跡で書かれてある。この道とは個性を生かす道である。

たまたまこの日は「新しき村」の花の日に当たっていて、午後、東京から武者小路実篤が来て、村の公会堂で講演をした。村内会員約五〇人、そこへ外から来た村外会員が加わっての集会だった。「人は自分にできない事はしなくてもいい」といった講演だった。

私は東京神田の新村堂で毎週木曜日の夜に「新しき村」の集まりがあることを教えてもらったので、そこへも出席した。村外会員中心の約二〇人の集まりだった。和室に丸くすわり、一人一人が順番に自己を語るのである。話題は違うのだが、人の話をよく聞く。お互いに自己を生かし合い、お互いの「内の力」を尊重し合う形がしっかり守られていた。

私はその集まりに、月に一回、武者小路実篤が来て話をすることを知った。月の第一日曜日の午後だという。

私はそこに出席して、武者小路実篤の話を録音させてもらうことを思い立ち、許可してもらうために、前日、自宅へ電話をした。電話口に、すぐ、武者小路実篤が出て私の話をきいて「いいですよ」と言ってくれた。この電話の場面は、私がはじめにこの教材の授業の導入として考えたことと完全に一致した。私はこのときの電話のやりとりを、教室で再現した。

新村堂での武者小路実篤の話の内容は、「個性についての雑感」に直結するものだった。私はその録音を、教室のすみずみにまで聞こえる音声で、授業の中で再生した。武者小路実篤は、内からわいてくる力の秘密について説明している。前以てその部分の録音を起こし、プリントにして生徒に配り、再生した。

ともかく私は、自分の心が本当に喜んで、心が素直にこういうことをしたいと思うのは、自分がしたいと思うのではなくて、自分をつくったものが、何かそれをさせたがっているものがあるし、それをさせたがっているのには、何かもう一つの知らない理由がありうるので、自分が本気になってものをしたいというのは、やはり、本気になってするだけの値打ちが自分にはある。

それが使命であるか、使命でないかは知らないけれども、

ともかくそれを書いていれば心が喜べるという仕事。

それは金をとるとか、あるいは何かほかの理由があって、そうして自分がこの世に生きるためには、ある程度、金が必要であるし、ある程度の生活が必要であるから、いくら苦しくてもこれだけの仕事はしなければならないと言った仕事は、僕は本当の仕事とは思わない。

やはりそういうことは忘れてしまって、そういうことを忘れても、何かの自分の知らない理由、深い深い理由が、そういう深い何かは別として、ともかく自分にはわからない理由で、自分が本気になって、真剣になってしたい仕事をすることは、やはり、何かの使命をそこには感じるものだと思うんです。（一九六九年の録音、武者小路実篤八四歳）

この録音の七年後、武者小路実篤は九一歳の生涯を終えた。

教材本文で個性は「内の力」になっているが、この録音では、自分が内の力によって何かをしたいと思う時は、自分がただそれをしたいと思うのではなく、自分をつくったものがそれをさせたがっているのだと深く掘り下げられている。自分をつくったものとは何か。神なのか。とすると、ここは宗教になってくる。

このことについては、鶴見俊輔が『現代日本の思想』（岩波新書）で、「宗教ということになると、白樺派の人々で神を信じると言いきった人は少ない。宗教を信じるというよりも、宗教を信じるということにたいする信仰。宗教を信じるというよりも、宗教性に親しむというほうがあたっている」とわかりやすく説明している。

録音に「心が喜んでこういうことをしたいと思うのは」とあるが、この喜びが「内の力」の核心的部分になってくる。武者小路実篤は詩「喜びは」で、「喜びよ、お前は何処からくる。深い、深い処からくるね、お前は。個人から生れるにしては、お前は深すぎる」と言っている。ここでも、個人よりも深いものの存在が予想されていて、考え方が宗教に近く、やはり宗教性への親しみということになる。

武者小路実篤は神と人間の関係について、「人生論」のなかで、「人間は神がつくったということは僕は信じられない。神がつくったものとしては人間は無常すぎ、不完全すぎる。しかし自然が生んだとしたら、あまりに傑作すぎるように思うのだ」と自分の考えを説明している。宗教的懐疑が持つ宗教性に親しんでいることになる。

「個性についての雑感」は短い教材ではあるが、人生論の指導もできる深さがあった。

私は「新しき村」の人たちが、外部から村へ取材の目的で人が入ってくるのをひどく嫌っているのを知ったので、私自身、村外会員として入会し、神田の新村堂の会に出席し続けた。国語の教材研究には、こうした配慮が必要になってくることもある。私には苦痛ではなかった。私も学んだし、授業は生徒がのめりこんでくる生きたものになったので、私は楽しかった。「新しき村」へ

は九歳の娘を連れていったので、武者小路実篤のそばへ行って話した時、彼は娘を見て笑顔で「お父さんによく似ていますね」と言ってくれた。

四、生きる力の教材化

一九六八（昭和四三）年に、山本茂実が『あゝ野麦峠』を発表し、飛騨地方から野麦峠をこえ諏訪湖畔の岡谷、松本、上田、佐久方面の紡績工場へ働きに出た工女たちの悲惨な現実が、あらためて、広く紹介された。その一部が高校の国語の教科書教材になった。

そこには一人の工女みねの死が書かれている。みねは苛酷な労働で病気になり、迎えに来た兄辰次郎のセイタでかつがれて野麦峠まで来たが、そこで故郷を見て、「ああ飛騨が見える、飛騨が見える」と喜び、そのまま息を引きとった。兄が買ってやった粥と甘酒には口もつけずに死んでいった。兄の辰次郎はあとで山本茂実に「みねは飛騨を一目見て死にたかったんじゃろう」と言って、大きなこぶしを顔に当てて泣いたという。当時、工場は死人を出したくないので、やつれて、見る影もなくなった病人は引き取らせていた。みねが野麦峠で死んだのは一九〇九（明治四二）年であった。

私はこの教材について、紡績工女について二つの事実を生徒に示すことを考えた。一つはその悲惨な姿、もう一つは、つらさの中で生きぬいた力強い姿である。

悲惨な姿については、細井和喜蔵の『女工哀史』（一九二五）があるが、私は小説家、劇作家、評論家である高倉輝の『日本の女』に紹介されている事実をとりあげることにした。

高倉輝の小学校の同級生に紡績工女になった少女がいた。その娘は工場で肺結核になり、郷里に帰された。漁村の人たちは肺結核をおそれ、海岸に小屋をたて、そこへ帰ってきた娘を入れた。小屋の入り口まで、波が寄せていたという。家の人がその小屋へ娘の食事を運んだ。娘は死んだ。村の人たちはその娘の死体を、小屋ごと、浜で焼いた。

これは悲しい物語だが、私はこれと並んでつらさの中で生きぬいた工女の姿も示したかった。涙を浮かべるだけが工女への思いというのでは一面的だと考えたからである。

幸い私はつらさに堪えて生きぬいた一人の紡績工女、高橋久代を知ることができた。その女性は六四歳だったが、一〇代の時に紡績工場で働いていた。私は彼女から貴重な話を聞くことができた。その話は録音し、教材にした。

久代は小学校五年を終えた時、宮城県の片田舎から東京に出てきて、東洋モスリンという紡績工場で働いた。小学校六年を終えなければ工女に応募できなかったのだが、家計を助けるため、六年を卒業したことにしてもらって、東京へ出た。三〇円の前金だった。久代は一一歳から一四歳までの四年間、その三〇円のために働いたのである。三〇円のための労働が終わっても、久代はそ

の工場で働きつづけた。久代が東京へ出て来たのは一九二二（大正一一）年であった。

工場の労働条件はきびしく、朝六時と夕方六時が昼勤務と夜勤務の交替時刻で、機械は二四時間動いていた。部屋は一つの部屋を二つのグループで交替で使うため、体調が悪くなって機械から離れて休もうとしても、自分の部屋ではもう一つのグループの工女が眠っているから、休む場所も無かった。機械から離れて寝ることはできなかったのである。機械の所にしか自分の居場所は無かった。

工場のまわりには、堀がめぐらされ、堀の外は川になっていた。川は工女が逃げ出すのをふせぐためのものであった。門からしか外へは出られず、外出するときには、帳場からもらった外出許可証を門番に見せなければならなかった。

久代たちは、「寄宿ながれて帳場が焼けて、巡視コレラで死ねばよい」と歌い、「会社づとめは監獄づとめ、かねのくさりがないばかり」と歌った。当時、ほかの紡績工場でも同じような歌が歌われていたが、久代たちもそれを歌っていたのである。

空腹になると、堀の小さい穴から、外にいるパン屋に声をかけて、パンを売ってもらった。パン屋もよく知っていて、その穴のところで待っていてくれた。

楽しみは年に一度の花見であった。その日、工女たちは、大太鼓、小太鼓、笛などを分担して楽隊をつくり、上野の山を行進した。千葉県の成田まで花見に行ったこともある。久代は小太鼓をたたいた。

花見のほかに、盆踊りがあった。久代は工女の生活について私に話してくれた最後に、盆踊りのときにみんなで歌った歌をきかせてくれた。その歌い方の強さのなかに、私は、工女として生きた時の久代の、何ものにもくじけまいとする生きる姿勢を感じた。とくに終りにつけるはやし言葉にそれが強くあらわれていた。

越後ヤー　出るときゃエー　涙で出たが
今じゃ　越後のエー　ヨシタ　風もいや
越後蒲原ごおり　こびきの出どこ
娘育ててエー　ヨシタ　女郎に売る
ヨシタベッチョ　ケンケン
ハネガハエテ　パッパ

この時久代は最後のはやし言葉「ヨシタベッチョ　ケンケン　ハネガハエテ　パッパ」を、襲ってくるものを跳ね返し、吹き飛ばしてしまう激しい調子で歌った。小学校五年で紡績工女になって生きた久代の生きる力が、力強く、声になっていた。歌い終わると久代は明るく笑った。

久代の出身地は宮城県であるが、歌には越後が出てくる。工場で先輩たちが歌っていた歌詞を久代も仲間と一緒に歌っていたのであろう。

越後には、明治の頃から、娘を芸者に出す親が多かった。この

ことは上笙一郎が『未明童話の本質』（勁草書房）で、「赤い蝋燭と人魚」に登場する娘の人魚の背景として指摘している。上笙一郎はその理由として、間引きを罪悪とする浄土真宗が盛んであるために子が増えすぎたこともあるが、何といっても親の貧困が決定的だと言っている。

東京の紡績工場の盆踊りの歌詞にもその現実が流れ込んでいた。歌では「芸者に出す」と言わず、「女郎に売る」と核心を衝く言葉が使われている。女郎と工女は同じではない。しかし親の貧困は自分たちと共通の問題であることを工女たちは感じとっていた。

自分の郷里が越後でなくても、この歌は自分の歌になっていた。盆踊りの時、工女たちがそろって大声で、「娘育ててエー、ヨシタ、女郎に売る」と歌いあげている光景は異様でさえある。その場面は日本の近代史の矛盾にかみついていくドラマであった。

紡績工場で働き続けていた久代は、一七歳の時、東京の人と結婚し、工場をやめた。その後、八人の子供を育てた。工場の苛酷な労働基準を堪えぬいた久代の生きる力は、その後の人生をもささえつづけ、それは子供たちに受けつがれていった。

久代の語りと歌には不思議にみずみずしい力があった。その録音テープは女工哀史の文学教育での貴重な教材になった。私は大学の講義でも使った。学生は熱心に聞いていた。

一九九九（平成一一）年四月一三日、久代は八六歳の生涯を終えた。栗駒山を遠く望み、源氏蛍が飛び交う宮城県の故郷に、久代は再び帰ることはなかった。私はこの一文を彼女の墓前に供えたいと思う。国語科教材研究には人の生き死にがかかわってくる。「文学を教えるということ」には数多くの人生のドラマが集まることを私は知った。

（おおかわら・ちゅうぞう　前奈良教育大学教授
前ＮＨＫテレビ・ラジオ講師）

＊本稿は、二〇〇三年七月一九日（土）立命館大学アカデメイア21にて開催された二〇〇三年度国語教育ゼミナール夏季大会での講演「文学を教えるということ」の内容を、改めて文章として起こしていただいたものである。